

都城・北諸県地域

土地分類基本調査

都 城

5 万 分 の 1

国 土 調 査

宮 崎 県

1 9 8 0

序 文

国土は、国民のための限られた資源であり、その有効利用を図ることが必要となっております。本県においても恵まれた自然環境を保全しつつ、地域の特性に応じた土地利用を行うべく、各種の施策を進めているところです。

本調査は、このような諸施策を進めるのに必要な調査のうち、「地形」「表層地質」「土壌」等についての土地条件を体系的かつ総合的に調査することを目的として、国土調査法に基づく都道府県土地分類調査を実施するものです。

本県では、昭和45年に経済企画庁により調査された「宮崎」図葉を除き、本年度から「都城」を手始めにして県内全域にわたり調査する計画であります。

さて、本年度調査しました「都城」については、県南部の中心として発展している都市を中心とする地域であります。この調査の成果が広く関係各位に御活用いただきますよう希望するものです。

最後に、本調査を実施するにあたり御指導御助言を賜った国土庁国土調査課をはじめ、関係各位の御指導御協力に対し感謝申し上げます。

昭和55年11月

宮崎県農政水産部長 白井俊昭

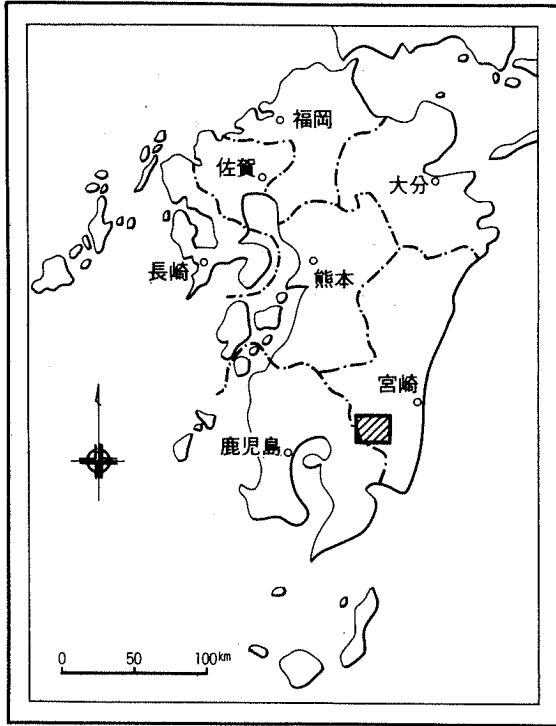
ま え が き

- 1 本調査は、国土調査法（昭和26年6月1日法律第180号）第5条第4項の規定により国土調査の指定を受け、土地分類調査関係の各作業規程準則（総理府令）に基づいて作成した「宮崎県土地分類基本調査作業規程」により実施したものです。
- 2 本調査の成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定による土地分類基本調査図及び土地分類基本調査簿です。
- 3 調査基図は、測量法第27条第2項の規定により、建設大臣の刊行した5万分の1地形図を使用したものです。
- 4 調査の実施、成果の作成関係者は下記のとおりです。

指 導	国 土 庁 国 土 調 査 課	西 嶋 輝 之	靱 倉 克 幹
総 括	宮崎県農政水産部農業振興課	黒 田 昭	
	”	長 友 弘 雄	
	”	古 賀 孝 士	
土地分類	都北土地分類基本調査研究会	野 村 綱 満	
及び表層	”	遠 藤 尚	
地質調査	”	岩 元 勝 也	
（水系谷	”	田 代 忠 光	
密度、傾	”	高 橋 幸 一	
斜区分、	”	塚 脇 正 光	
起伏量、	”	小 松 秀 彦	
標高区分	”	檀 上 隆	
を含む）	”	山 内 巖	
	”	崎 浜 秀 樹	
	”	中 原 征 五	
	”	那 須 俊 一	
	”	木 原 貞 雄	

	〃	杉田剛
	〃	曾山睦生
	〃	宮脇繁
土壤調査	宮崎県総合農業試験場	中村信夫
	〃	河野満雄
	〃	野中仙三郎
	〃	赤木康
	宮崎県林業試験場	細山田典昭
	〃	菅道教
	〃	宮畑博行
	〃	深江伸男
土地利用 現況調査	宮崎県農政水産部農業振興課	古賀孝士

位置図



目 次

序 文

まえがき

総 論

I 位置及び行政区画	1
II 地域の特徴	2
III 人 口 等	3
IV 主要産業の概要	5

各 論

I 地 形 分 類	11
II 表 層 地 質	13
III 土 壤	19
IV 土地利用現況	24

〔地 図〕

地形分類図，表層地質図，土壤図，傾斜区分図

水系谷密度図，土地利用現況図，起伏量図，標高区分図

総論

I 位置及び行政区画

1 位置

「都城」図葉は宮崎県の西南部に位置し、図葉の西南部で鹿児島県と接している。図葉の経緯度では、東経 $130^{\circ}00' \sim 131^{\circ}15'$ 、北緯 $31^{\circ}40' \sim 31^{\circ}50'$ の範囲内にあり、宮崎県域 419.9km^2 、鹿児島県域 17.8km^2 で全面積 437.7km^2 である。

2 行政区画

本図葉の行政区画は、宮崎県域が都城市、日南市、田野町、北郷町、三股町、山之口町、高城町、山田町、の2市6町であり、鹿児島県域が財部町、末吉町、の2町である。

図I-1 行政区画図

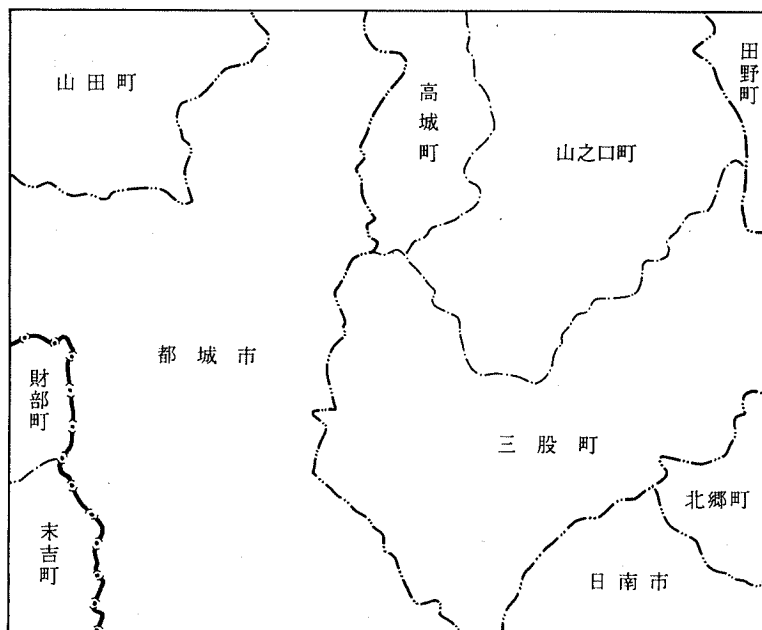


表 1-1 図葉内の市町村別面積

市 町 名	図 葉 内 の 面 積		市町村全面積 B (km ²)	A/B (%)
	実数 A (km ²)	構 成 (%)		
都 城 市	155.1	35.5	306.7	50.6
日 南 市	19.5	4.5	294.9	6.6
田 野 町	7.8	1.8	109.0	7.2
北 郷 町	12.8	2.9	179.1	7.1
三 股 町	99.8	22.8	109.8	90.9
山 之 口 町	70.2	16.0	97.8	71.8
高 城 町	22.1	5.0	94.1	23.5
山 田 町	32.2	7.4	61.6	52.3
宮崎県小計	419.5	95.9	1,253.0	33.5
財 部 町	6.6	1.5	115.9	5.7
末 吉 町	11.2	2.5	129.5	8.7
鹿児島県小計	17.8	4.1	245.4	7.3
合 計	437.3	100.0	1,498.4	29.2

資料：建設省国土地理院調べ、ただし、図葉内面積については、宮崎県農業振興課調べ。

II 地 域 の 特 性

本図葉は、東側を南那珂山地と諸県山地及びその南東支脈及び西側を諸県山地の北西支脈で挟まれ、盆地を形成している。

この盆地の中央部を大淀川及びその支流が南から北に貫流している。

本地域の年平均気温は15.5℃、年平均降水量は2,600mmである。

産業では、米・畜産を中心とした農業が盛んであり、大規模な土地改良事業が予定されている。また、近年工場誘致等がはかられ、県南部の中心都市である都城市を軸に今後の発展が期待されている。

Ⅲ 人 口 等

図案内に含まれる市町村の人口は280,937人である。

昭和45年10月の人口と昭和50年10月の人口を比較してみると、三股町を除き各市町とも人口が減少し、全体では4.6%減少している。しかし、昭和50年10月と昭和55年1月と比較してみると、各市町とも増加傾向にあり、全体では6.7%の増加率となっており、ほぼ人口の減少傾向はおさまっている。

また、世帯数については、一貫して増加傾向にあり核家族化の進行を示している。

就業構造をみると、町部については第1次産業の就業者が多く、市部については第3次産業の就業者が多い。全体的に就業構造をみると、県平均とほぼ同じ傾向にある。

表Ⅲ-1 人 口 動 態

項目 市町村名	昭和50年 国勢調査		昭和55年1月1日 住民台帳		世帯増減率(%)			人口増減率(%)		
	世帯数 (世帯)	人口 (人)	世帯数 (世帯)	人口 (人)	55/45	50/45	55/50	55/45	50/45	55/50
都 城 市	35,979	118,289	42,316	127,914	122.8	104.4	117.6	106.8	98.8	108.1
日 南 市	15,429	52,171	17,066	54,302	109.5	99.0	110.6	96.4	92.6	104.1
田 野 町	2,842	9,856	3,441	10,993	125.1	103.3	121.2	99.9	89.5	111.5
北 郷 町	1,545	5,638	1,813	6,080	116.7	99.4	117.3	89.8	83.3	107.8
三 股 町	4,693	15,789	5,469	17,714	130.6	112.0	116.5	115.2	102.7	112.2
山之口町	2,121	7,106	2,460	8,028	122.5	105.6	116.0	107.3	95.0	113.0
高 城 町	3,783	12,727	4,144	13,826	112.6	102.8	109.5	98.6	90.7	108.6
山 田 町	2,383	8,597	2,547	9,021	113.5	106.2	106.9	94.9	90.4	104.9
宮崎県 小計	68,775	230,173	79,256	247,878	119.2	103.5	115.2	103.2	95.8	107.7
財 部 町	4,024	12,043	4,173	11,952	—	—	103.7	90.1	90.8	99.2
末 吉 町	6,799	21,049	7,127	21,107	—	—	104.8	94.6	94.3	100.3
鹿児島県 小計	10,823	33,092	11,300	33,059	—	—	104.4	92.9	93.0	99.9
合 計	79,598	263,265	90,556	280,937	119.2	103.2	113.7	101.9	95.4	106.7

表Ⅲ-2 就業構造

項目 市町名	第1次産業		第2次産業		第3次産業		計	
	比率	就業者数	比率	就業者数	比率	就業者数	比率	就業者数
都 城 市	23.8%	13,358人	23.7%	13,280人	52.5%	29,422人	100%	56,060人
日 南 市	22.4	5,405	25.1	6,046	52.5	12,632	100	24,083
田 野 町	45.5	2,344	21.2	1,091	33.3	1,717	100	5,152
北 郷 町	48.4	1,247	23.5	605	28.1	723	100	2,575
三 股 町	36.6	2,802	23.6	1,809	39.8	3,042	100	7,653
山之口町	40.9	1,466	28.1	1,009	31.0	1,114	100	3,589
高 城 町	53.1	3,473	17.3	1,129	29.6	1,933	100	6,535
山 田 町	55.6	2,523	19.3	877	25.1	1,142	100	4,542
宮崎県 小計	29.6	32,618	23.5	25,846	46.9	51,725	100	110,189
財 部 町	63.2	4,123	11.1	724	25.7	1,674	100	6,521
末 吉 町	56.2	6,343	17.1	1,926	26.7	3,011	100	11,280
鹿児島県 小計	58.8	10,466	14.9	2,650	26.3	4,685	100	17,801
合 計	33.7	43,084	22.3	28,496	44.0	56,410	100	127,990

昭和50年10月の国勢調査による。

IV 主要産業の概要

1 農 業

本地域の農業の特色は、農業粗生産に占める畜産部門の割合が過半を占めることである。特に、養豚、肉用牛（宮崎牛）の生産については、県内の主要産地を形成している。また、野菜、工芸農作物の生産も盛んであり、畜産との複合経営化が図られている。農業基盤の整備についても、大規模土地改良事業等が予定され、ほ場整備、かんがい排水、農道等の整備が進行している。

2 工 業

本地域は、農産物を原料とした焼酎や乳製品及びハム等の食品工業が盛んである。また、近年繊維、衣料を中心に企業立地が進み、本地域で主要な地位を占めている。

なお、木製品等については、木刀、大弓の生産が全国的に有名であり、家具製造も盛んである。

3 商 業

商業の中心地は都城市で、本地域の年間販売高の3分の2以上を占め、北諸県郡内だけでなく、鹿児島県曽於郡も含んだ広域商圈を形成している。

4 観 光

本図葉内の主な観光地は、わにか県立自然公園に含まれる、三股町の長田峡、山之口町の青井岳、母智丘関之尾県立自然公園に含まれる都城市の母智丘がある。

表Ⅳ-1 農業粗生産

項目 市町名	合計 ①=②+③ +④+⑤	耕 種					養 蚕 ③	畜	
		耕種計 ②	米	いも類	野 菜	その他		畜産計 ④	肉用牛
都 城 市	28,505	8,759	4,788	606	1,880	1,485	144	19,520	4,022
	(100)	(30.7)	(16.9)	(2.1)	(6.6)	(5.1)	(0.5)	(68.5)	(14.1)
日 南 市	8,063	4,298	1,475	210	833	1,780	22	3,734	269
	(100)	(53.3)	(18.3)	(2.6)	(10.3)	(22.1)	(0.3)	(46.3)	(3.3)
田 野 町	4,386	3,407	390	163	1,767	1,087	7	556	167
	(100)	(77.6)	(8.9)	(3.7)	(40.1)	(24.9)	(0.2)	(12.7)	(3.8)
北 郷 町	2,666	1,337	369	48	344	576	5	1,316	199
	(100)	(50.1)	(13.9)	(1.8)	(12.9)	(21.5)	(0.2)	(49.4)	(7.5)
三 股 町	4,932	1,904	984	57	382	481	21	2,964	889
	(100)	(38.6)	(19.9)	(1.2)	(7.7)	(9.8)	(0.4)	(60.1)	(18.0)
山之口町	2,442	814	540	42	150	82	52	1,564	618
	(100)	(33.3)	(22.2)	(1.7)	(6.1)	(3.3)	(2.1)	(64.1)	(25.3)
高 城 町	6,988	2,372	1,217	140	520	495	25	4,572	1,401
	(100)	(33.9)	(17.4)	(2.0)	(7.4)	(7.1)	(0.4)	(65.4)	(20.0)
山 田 町	4,729	1,680	741	111	315	513	93	2,946	807
	(100)	(35.5)	(15.6)	(2.3)	(6.7)	(10.9)	(2.0)	(62.3)	(17.1)
宮 崎 県 小 計	62,711	24,571	10,504	1,377	6,191	6,499	369	37,172	8,372
	(100)	(39.2)	(16.7)	(2.2)	(9.9)	(10.4)	(0.6)	(59.3)	(13.4)
財 部 町	5,313	2,271	896	370	349	656	87	2,768	1,283
	(100)	(42.7)	(16.8)	(6.9)	(6.6)	(12.4)	(1.6)	(52.1)	(24.1)
未 吉 町	11,949	4,013	1,465	601	518	1,429	81	7,671	2,011
	(100)	(33.6)	(12.3)	(5.1)	(4.3)	(11.9)	(0.7)	(64.2)	(16.8)
鹿 児 島 県 小 計	17,262	6,284	2,361	971	867	2,085	168	10,439	3,294
	(100)	(36.4)	(13.7)	(5.6)	(5.0)	(12.1)	(1.0)	(60.5)	(19.1)
合 計	79,973	30,855	12,865	2,348	7,058	8,584	537	47,611	11,666
	(100)	(38.6)	(16.2)	(2.9)	(8.8)	(10.7)	(0.7)	(59.5)	(14.6)

資料：昭和55年7月 「宮崎県の生産農業所得統計」

「鹿児島県の生産農業所得統計」

額及び生産農業所得

単位：百万円，%

産				加 工 農産物 ⑤	生産農業 所得率 %	生産農業 所得	生産農業所得	
乳用牛	豚	鶏	その他				農家一ヶ所 当り(千円)	耕地10a 当り(千円)
2,877	7,415	5,156	50	82	38.9	10,488	993	121
(10.1)	(26.0)	(18.1)	(0.2)	(0.3)				
191	2,959	299	16	9	46.6	3,421	1,122	130
(2.4)	(36.7)	(3.7)	(0.2)	(0.1)				
54	111	220	4	416	64.5	2,722	2,440	232
(1.2)	(2.5)	(5.1)	(0.1)	(9.5)				
—	1,108	9	—	8	46.1	1,124	1,572	134
—	(41.6)	(0.3)	—	(0.3)				
454	654	956	11	43	44.8	2,078	1,011	129
(9.2)	(13.3)	(19.4)	(0.2)	(0.9)				
429	297	217	3	12	48.0	1,099	999	125
(17.6)	(12.2)	(8.9)	(0.1)	(0.5)				
543	1,113	1,512	3	19	41.7	2,779	1,266	139
(7.8)	(15.9)	(21.7)	(0.0)	(0.3)				
394	1,089	649	7	10	43.5	1,956	1,297	136
(8.3)	(23.1)	(13.7)	(0.1)	(0.2)				
4,942	14,746	9,018	94	599	40.9	25,667	1,151	133
(7.9)	(23.5)	(14.4)	(0.1)	(1.5)				
173	486	816	10	187	43.7	2,323	857	105
(3.2)	(9.1)	(15.3)	(0.6)	(3.6)				
170	1,551	3,927	12	184	36.1	4,314	1,017	107
(1.4)	(13.0)	(32.9)	(0.1)	(1.5)				
343	2,037	4,743	22	371	38.4	6,637	95	106
(2.0)	(11.8)	(27.5)	(0.1)	(2.1)				
5,285	16,783	13,761	116	970	40.4	32,304	1,099	126
(6.6)	(21.0)	(17.2)	(0.1)	(1.2)				

表Ⅳ-2 地

市町名	項目	総計	食料品	織衣	維料	木製品等 木材	紙加工品 パルプ紙
	都 城 市	A	82,207	34,789	10,402	16,775	1,773
	B	507	149	32	161	7	
日 南 市	A	42,619	X	282	7,800	23,821	
	B	266	83	6	74	4	
田 野 町	A	2,369	1,475	X	172	—	
	B	22	6	1	8	—	
北 郷 町	A	2,241	X	X	1,164	X	
	B	16	1	1	11	1	
三 股 町	A	8,424	407	4,334	1,363	—	
	B	50	5	9	16	—	
山 之 口 町	A	2,163	—	X	377	—	
	B	22	—	1	7	—	
高 城 町	A	3,962	X	X	X	—	
	B	32	1	2	6	—	
山 田 町	A	1,194	149	X	X	—	
	B	17	5	5	1	—	
宮 崎 県 小 計	A	145,179	X	X	X	X	
	B	932	250	57	284	12	
財 部 町	A	1,898	628	X	X	X	
	B	36	27	1	3	1	
末 吉 町	A	40,967	31,776	X	2,985	—	
	B	55	33	3	12	—	
鹿 児 島 県 小 計	A	42,865	32,404	X	X	X	
	B	91	60	4	15	1	
合 計	A	188,044	X	X	X	X	
	B	1,023	310	61	299	13	

A = 製造品出荷額等 (百万)

B = 工場数 (ヶ所)

資料：1978年 「宮崎県の工業」 「鹿児島県の工業」

域 の 工 業

出 ・ 印 版 刷	化 学 等	ゴ ム 革	皮 等	窯業土石	鉄鋼金属	機械器具	そ の 他	従業員数 (人)
1,096	X	X		5,109	1,985	X	743	8,735
22	2	2		48	36	9	39	
462	X	—		2,259	1,561	X	195	3,850
19	1	—		19	24	21	15	
X	X	—		24	—	X	—	497
1	1	—		4	—	1	—	
—	—	—		—	—	—	X	422
—	—	—		—	—	—	2	
—	—	X		519	X	X	60	1,195
—	—	1		7	7	2	3	
—	—	—		1,003	—	X	X	459
—	—	—		11	—	2	1	
X	—	X		396	165	—	X	799
1	—	1		8	11	—	2	
—	—	—		X	X	—	318	305
—	—	—		2	1	—	3	
X	X	X		X	X	X	X	16,262
43	4	4		99	79	35	65	
—	—	X		708	—	—	—	290
—	—	1		3	—	—	—	
X	—	—		920	X	—	—	1,729
1	—	—		5	1	—	—	
X	—	X		1,628	X	—	—	2,019
1	—	1		8	1	—	—	
X	X	X		X	X	X	X	18,281
44	4	5		107	80	35	65	

表Ⅳ-3 地域の商業

市町名	項目	商店数	従業員数	年間販売額
都 城 市		2,592 ^{ヶ所}	11,886 ^人	194,484 ^{百万円}
日 南 市		1,207	4,518	62,402
田 野 町		159	381	4,211
北 郷 町		52	163	1,216
三 股 町		238	676	9,099
山 之 口 町		134	285	2,382
高 城 町		237	566	6,040
山 田 町		148	396	2,752
宮崎県小計		4,767	18,871	282,586
財 部 町		214	532	3,591
末 吉 町		287	873	7,299
鹿児島県小計		501	1,405	10,890
合 計		5,268	20,276	293,476

資料：昭和54年「宮崎県の商業」「鹿児島県の商業」

各論

I 地形区分

本地域の地形を概括すると、東半部には東岳・柳岳などを主峯とする山地が北から南南西に続き、西には隣接する国分図幅の中央部を北から南に続く瓶台山—白鹿岳の山地があって、二つの並走する地壘状の高まりに挟まれて地溝状の凹地があると言える。これを都城盆地と呼ぶとすれば、本地域を地形的に大きく区分すると東縁山地と盆地底の二つとなる。山地は高く、起伏に富み、谷密度・傾斜度が大きく、盆地底はその逆であって平坦面が発達している（標高区分図、起伏量図、水系・谷密度図、傾斜区分図を参照のこと）。

大淀川は盆地底部の幾らか東寄りの所を南から北に流れ、両岸に発達する氾濫原が低地を作る。東縁山地から流下する東岳川・沖水川・萩原川・安久川などは山地を刻む谷沿いに河岸段丘を残すと同時に山地の出口から西（及び北西）に向かって現在は開析されている扇状地を作り、大淀川の氾濫原に続く現河床両側の低地も扇状地的性質を示している。

本地域の北西隅から南西隅にかけては高度180~260mのシラス台地が続き、木之内川・山田川・丸谷川・古江川・庄内川・横市川など東流する諸河川に切られて断片化すると共に、小さな谷に刻まれて丘陵化し、台地面が消失して行きつつある。このシラス台地の東側に一段低く高さ150~170mの平坦な台地面があり、上記諸河川によって断たれているが、本地域の北端から南端まで続いている。これを成層シラス台地と呼んでおく。ここに言う成層シラスは広い意味では二次シラスに当たるが、二次シラスはシラス層堆積後現在までの間にシラス層から由来したもの全てを含んでいるのに対して、成層シラス層はシラス層堆積の直後、河岸段丘や上記の開析扇状地形成以前にこの地域にできた湖に堆積し、一続きの平坦面を作っているものに限って使うことにする。

成層シラス台地はシラス台地に比べて、小さな谷による開析が少なく、平坦面を広く残存しており、台地の輪郭は単純である。シラス台地・成層シラス台地は大淀川の西側に広く発達しているが、高城及び梅北では東側にも拡がっており、東縁山地の谷沿いや末端部にもシラス台地が残存している。シラス台地・成層シラス台地を刻む河道両岸の低地は氾濫原の性質を示すが、段丘化しており、自然堤防・後背湿地の区分は明瞭でない。

成層シラス台地面は東縁山地に接する附近で扇状地的性質を示すようになる（石山及び安久）。又、蓼池附近では開析扇状地に取り囲まれて、一段高い面が点在している。この面は高さから見て成層シラス台地と同時期のものであるが、成層シラス層を見ず、成層

シラス台地面に比べて幾らか起伏を示している。凸部の古い岩層とそれを取り囲んでいる扇状地性礫層の上に薄くシラス層が残存しているので、古い扇状地がシラス層におおわれた後、上位のシラス層が取り去られて再露出した一種の化石削剥面である。

シラス台地・成層シラス台地を刻む河谷に沿って、大淀川より東側での河岸段丘や開析扇状地と同時期の河岸段丘が形成されている。これらの河岸段丘や開析扇状地は、現河床からの比高の違いによって数段に細分できるが、地形分類図では一括して示してある。

東縁山地は起伏量・谷密度・傾斜度から鱈塚山・小松山（隣接する日向青島図幅内）—東岳—柳岳—牛峠へ連なる山地と、それ以外の山地に区分できる。前者を東岳—柳岳山地、後者を青井岳—大谷山山地と呼んでおく。東岳—柳岳山地は起伏量が大きい、頂部に緩起伏地が僅かに残存しており（東岳附近・柳岳南東など）、遷急点が多い。青井岳—大谷山山地は起伏量は小さく、西縁は山麓地状を呈して、盆地底に孤立丘陵を点在させている。図幅の上端中央部の茶臼陣山及び北西部の小手ヶ山はこの山地と同様の性質を示している。又、図幅左端中央部の丸山及び西南部の高の峯（隣接国分図幅内）はシラス層による埋没を免れた安山岩熔岩よりなる丘陵である。

（遠 藤 尚）

II 表層地質

固結堆積物である四万十累層群は主として山地を作ると共に盆地下の土台となり、未固結堆積物は主として盆地底部を埋積すると共に山地を刻む河谷に沿って分布している。

1 四万十累層群

下位の山之口層群と上位の中郷層群とに大別される。激しく変形されており、詳細な層序区分・層厚・構造は未確定であるが、両層群は整合に重なり、波長10km位で大まかな背斜・向斜を繰り返している。上位の中郷層群は大まかな向斜部に分布し、本地域の東部から南西部にかけて傾斜度・起伏量の大きい東岳―柳岳山地を作ってケスタ（又はホグバック）の崖面を盆地側に向け、又、石山の東側では崖面を東に向けたケスタ地形を作っている。下位の山之口層群は大まかな背斜部に分布し、傾斜度・起伏量の小さい「あおいだけ」―大谷山山地や茶臼陣山・小手ヶ山などを作っている。

(1) 山之口層群

黒色頁岩優勢な地層で、砂泥細互層・砂泥互層・砂岩層を頻繁に挟み、1枚の礫岩層を含んでいる。頁岩には鱗片状の滑り面が発達し、介在する薄い砂岩層はちぎれてレンズ状～角礫状となって頁岩中に含まれている。かなり厚い塊状砂岩・板状砂岩が挟まれているが、走向方向に連続せず、レンズ化すると共に、大～小の規模の複雑な褶曲を見せている。例えば「あおいだけ」山地で永野・日豊本線楠ヶ丘信号所・大古内川右岸・同左岸に見られるかなり厚い砂岩層は、波長2km位の等斜状褶曲によって繰り返して露出したものである。最上部に近い所に輝緑岩（変質玄武岩）層と赤紫色～淡緑色頁岩層が相伴い又は単独に連続している。その下位に最大径1cmのチャートの完円礫からなり、頁岩破片（最大径4cm）を多量に含む礫岩層があって、大体同層準と見られる所に断続して分布している。

(2) 中郷層群

砂岩優勢な地層であるが、間にかんりの頁岩層・砂泥細互層・砂泥互層を挟み、岩相から次のように細分される。

(1) 高畑部層：主に砂岩からなり、砂泥互層・砂泥細互層・頁岩層などを薄く挟んでいる。砂岩は中～粗粒、塊状、時に板状である。頁岩の小破片や薄い石灰パッチを含むことが多い。上半部は細礫質である。この礫質部の下位に赤紫色～淡緑色頁岩層を挟むことがある。

(2) 柳岳部層：極粗粒の砂を基質とした細礫岩～礫岩を主とし、砂礫互層を伴い、頁岩のパッチや破片を多量に含んでいる。上・下限部に泥を基質とした礫岩が見られる。

(3) 湯屋谷部層：暗色～帯緑暗色頁岩を主とし、砂泥細互層や少量の砂泥互層・礫岩層を含んでいる。頁岩は塊状又は板状であるが、変形がひどく粘板岩状～鱗片状となり、挟在する薄い砂岩層はちぎれてレンズ化し、山之口層群の頁岩優勢な部分に似ている。しかし、拳大のノジュール（団塊）や砂岩・頁岩・泥灰岩などの角礫を含んだり、泥を基質として頁岩破片を多量に含む碎屑性泥岩が多い点で違っている。何枚かの中～粗粒砂岩層や板状砂岩層を挟み、下半部に1枚の礫岩層がある。この礫岩は最大径1cmのチャートの半円礫や多量の頁岩破片（最大径1.5cm）を含み、山之口層群の礫岩に似ている。

(4) 鼻切峠部層：層理の発達した砂岩優勢な中程度の砂泥互層を主とし、稀に砂岩層・砂泥細互層・頁岩優勢な砂泥互層などを挟んでいる。ひどく変形しており、露頭では過褶曲を示すことが多い。

(5) 鍋谷部層：中～粗粒の砂岩を主とし、細礫岩・礫岩を伴っている。石炭のレンズやパッチを伴うことがあり、全体として高畑部層や柳岳部層に似ている。しかし、層理・葉理（時に斜交葉理）が発達した板状砂岩が多い点で違っている。

(6) 尾平野部層：層理の発達した暗色～帯緑暗色の頁岩を主とし、砂泥互層～細互層を伴っている。激しく変形した過褶曲を示し、薄い砂岩層はレンズ化し、湯屋谷部層に似ている。

中郷層群は盆地の南縁部では、上記の順で比較的整然と北から南に配列しているが、それ以外の所ではかなり複雑な分布を示している。牛の峠東方では湯屋谷部層が向斜を作っているが、その南側には柳岳部層が見られない。割岩谷では高畑部層上半の礫質部が分布しているが、西方では中～粗粒の砂岩層が湯屋谷部層に接している。槻の河内川左岸の向斜南東翼では、鍋谷・柳岳両部層が直接に重なる。又、沖水川北方から青井岳にかけては上記の関係が見られず、高畑部層に似た中～粗粒砂岩層と、鍋谷部層に似た板状砂岩層との間に暗色頁岩層や砂泥細互層を挟んでいる。全体を通じ大きな褶曲の中に小さな褶曲が重なると共に、多くの断層で変位しているようで、岩層は連続して追跡できない。

2 未固結堆積物と火山性岩石

新しいものから順に次のように分けられる。

- (1) 現河床堆積物：現河道とその両側に広がる低地を構成する砂礫層。一般に薄い（厚さ10 m以下）。大淀川以東の山地から流下する河川では、礫が粗大で、扇状地堆積物の性質を示す。表面に火山灰層を見ない。
- (2) 河岸段丘・開析扇状地堆積物：河岸段丘と大淀川右岸側に発達する開析扇状地を構成する砂礫層。一般に厚さ5 m前後。開析扇状地では礫が粗大であり、部分的に泥層を伴うことがある。数段に区分でき、沓瀬原面からの比高によって、砂礫層の上に第二オレンジを除く火山灰層を乗せる場合と、火山灰層の上に薄い（3 m以下）砂礫層を乗せる場合がある。
- (3) 成層シラス層（都北湖成層）：主にシラス層から洗い出されて来た泥と細粒の砂が細かい縞を作っている堆積物である。その表面は平坦で、高度150～170 mの平らな台地（成層シラス台地）を作っている。厚さは一般に10 m以上であるが、成層シラス台地分布地域の外縁に近づくと薄くなり、下位の入戸シラス層（入戸軽石流堆積物）の上に乗っている。入戸シラス層堆積後の湖成層で、場所により泥がちの場合（湖心部）と砂がちの場合（湖岸部）があり、軽石を多量に含む所もある。周辺部では砂礫層に移り変わる。第二オレンジ以上の火山灰層におおわれている。
- (4) 入戸軽石流堆積物の非熔結部（入戸シラス層）と熔結部：シラス台地を作る火砕流堆積物のうち最も新しいもの。火山ガラスを主とする砂と軽石礫が雑然と混ざりあっているが、場所により軽石の密集している部分と少ない部分とに分れていることがある。最下位に厚さ1 m以下の栗粒大軽石層（大隅降下軽石層）を伴い、大淀川以東では熔結していることが多い。シラス台地の比高は100 mに達し、見掛上は厚いが、下位により古い火砕流堆積物が埋まっている可能性がある。旧期火山灰層を敷き、第二オレンジ以上の火山灰層におおわれている。熔結部・非熔結部共幾つかの異った岩相が識別されるが、境界が見えないので一括して図示した。
- (5) 旧期火山灰層：入戸軽石流堆積物の直下にある火山灰層で、2枚の軽石層を挟んでいる。上記して来た第二オレンジ以上の火山灰層に比べて粘土化が進んでいる。入戸シラス層下の不透水層となり、シラス地帯の谷底面を決定している。シラス台地より高位の地形面では、第二オレンジ以上の火山灰でおおわれている。図示はしていない。

- (6) 野上軽石流堆積物（野上シラス層）：入戸軽石流堆積物及び旧期火山灰層におおわれ、下記する都城礫層の上に乗るシラス類似の堆積物である。山之口町野上でだけ見られる。
- (7) 都城礫層：入戸軽石流堆積物及び旧期火山灰層におおわれ、下記する勝岡軽石流堆積物の上に乗る粗大な扇状地性礫層である。厚さは5 m前後で、礫は風化が進み、いわゆる「くさり礫」である。レンズ状に砂・泥を挟むことがある。沖水川北岸の高才原の下に連続して見られるほか、東岳川まで拡がる開析扇状地上に一段高い緩やかな起伏を示す面を作っている。この面の凸部には勝岡軽石流堆積物があり、その周囲に都城礫層があって、旧期火山灰層や現在は殆どけずり取られた入戸軽石流堆積物を乗せている。この地域にあった古い扇状地が入戸軽石流堆積物でおおわれた後、成層シラス台地形成期に入戸軽石流堆積物がけずり取られて再度剥き出されたものである。
- (8) 勝岡軽石流堆積物（勝岡シラス層）：都城礫層におおわれる火砕流堆積物で、軽石塊も基質も暗色であり、岩片が多量に含まれている。表面は風化し粘土化が進んでいる。
- (9) 堂山軽石流堆積物（堂山シラス層）：本地域北端近くの荒ヶ田附近で、成層シラス台地上に突出した幾つかの小丘陵を作っている軽石流堆積物で、粘土化が進んでいる。旧期火山灰層におおわれている。
- (10) 唐仁田礫層：本地域北東隅の山地頂部に僅かに分布している礫層である。隣接図幅（日向青島・宮崎・野尻）などではかなり広く分布し、最高位の段丘面を作っている。数枚の凝灰岩層を挟んでいる。
- (11) 丸山・高の峯安山岩：本地域西端中央の丸山と南西部の高の峯を作る基性の安山岩類である。風化してボール状になっていることがある。旧期火山灰層におおわれている。
- (附) 新期火山灰層：入戸軽石流堆積物をおおう火山灰層で、表層地質図の欄外にその柱状図を示した。盆地底の平坦面上に、その古さに応じて乗っているほか、山地の斜面上にも見られる。

3 応用地質

(1) 斜面崩壊

シラス地帯の斜面崩壊は有名であるが、垂直な切り取りが眼につく。シラスは垂直に切った方が安全というのは誤解であって、シラス台地縁で安定している斜面の傾斜は 30° ～ 45° である。垂直な崖は人工的或いは自然に下端を削られつゝある所に見られ、安定して

いるのではないことは忘れてはなるまい。シラス層下の旧期火山灰層を基準としてシラス地帯の低平な谷底ができてきていることは、そこから水が湧き出すためである。人工的にシラス層を切り取ることは、水に弱いシラスを水にさらすことであり、旧期火山灰層を切ることは崩壊し易い地層の境界を露呈することになるので十分な注意が必要である。

成層シラス台地でも谷頭（地名）で見られた谷頭部の大崩壊や台地縁での崩壊が見られる。一般に台地では、崩壊に対して台地面上が安定であり、台地縁・斜面及び台地縁の直下が危険である。このことは段丘や開析扇状地でも同じことである。

山地での斜面崩壊は、斜面をおおう碎屑物（崖錐層）の崩壊が大部分である。中郷層群の砂岩層には節理が多く、急な斜面が作られると同時に、生産された大～小の岩片は斜面をおおって崩れ易い崖錐層となる。東縁山地では現在も多数の斜面崩壊が見られるが、これがかかなり長期間継続して来ていることは、盆地底を埋める扇状的堆積物に示されている。中郷層群の頁岩層は起伏の小さな斜面を作るが、その上に乗る崖錐層は地入り状の移動をする傾向がある。又、この頁岩は大気にふれると膨張する性質があり、路床や隧道でいわゆる「盤ぶくれ」を起こしている。

山之口層群の頁岩には鱗片状の滑り面が発達しており、路床としては堅硬であるが、切り取りの法面は不安定で崩壊が頻発している。固結堆積物において一般に「流れ盤」側は危険であり、「受け盤」側は安全であると言われているが、「受け盤」側が安全なのは、硬一軟・粗一密と性質の違う二種類の岩層が組みあって、お互いの欠点を相補っているからである。四万十累層群のように異った種類の岩層が同じように固結し、共通の節理で貫かれている場合は、「受け盤」側は必ずしも安全ではない。

斜面崩壊が斜面をおおう崖錐層の崩壊によるという観点は、斜面が火山灰層でおおわれている場合にもあてはまる。シラス地帯での崩壊もシラス層の斜面をおおう火山灰層の崩落が多く、そのため露呈したシラスの表面が水に洗われて特有の侵蝕形態を見せているのとは区別することが必要である。この地域で斜面崩壊を起こし易い火山灰層の一つは御池降下軽石層（御池ボラ）である。御池ボラの層厚は図示したように本地域の北西で厚く、南東に薄くなるが、全面的に崩壊を起こしており、特に厚さ数mに達する北西部では崩壊が大規模である。

旧期火山灰層も崩壊を起こし易いものの一つで、斜面に乗っていたり、切り取りによって露呈したりすると、粘土化して滑り易くなった軽石層が滑り面となって、上位の土層や

岩層が崩壊している。

崩壊した碎屑物は土石流となって谷沿いに流下し、扇状地状に堆積すると共に、下流の河床を荒れ河原にする。東岳―柳岳山地の谷底には古い土石流の堆積物が随所に残っていると共に、荒れ河原状の河床が多い。

(2) 氾 濫

都城盆地は現在だけでなく過去においても盆地であった。盆地の特徴は出口が閉塞されていることであり、近い過去において湖であったこともある（都北湖成層～成層シラス層の時期）。閉塞された盆地の性質は都北湖が排水され、成層シラス台地が広く開析された現在まで継続して来ており、大淀川及びそれに合流する諸支流が蛇行しているのは、図幅外の下流の轟附近で大淀川が閉塞されているためであり、シラス台地や成層シラス台地・河岸段丘の縁が弧を画いているのは、台地を刻む河川が蛇行していたことを示している。

又、盆地には周囲の山地から水が集まって来る。大淀川には東・西から幾つかの河川が合流している。出口が閉塞され、周囲の水が集中する所には、氾濫による災害の危険が付きまとう。氾濫は当然、現河道両側の低地に集中し、冠水・氾濫土砂による埋没・土地流失などの災害を発生させる。冠水は低地の微起伏により程度が異なるので、土地利用には微起伏を利用する観点が必要である。地形を無視した碁盤目状道路は、ある場合氾濫水を防ぐ堤防の役割りを果たす反面、浸水区域の冠水を深くし、長くする原因ともなろう。山地域においては水だけでなく、土石流にも十分注意する必要がある。

(3) 水

盆地底を埋積している若い堆積物は被圧地下水の滞水層となっており、この地域には多数の深井戸が掘られ、産業及び上水道として利用されている。又、旧期火山灰層の上に乗るシラス層は貯水層となっており、それを利用してシラス地帯の集落密度は意外に大きい。

四万十果層群中には幾つかの冷泉が湧出している。多くは現在利用されていない。シラス地帯でも冷泉を見ることがあり、湯治よりはレジャーの対象となっているようである。

水で問題は排水である。生活の変化による排水の汚濁化と畜産からの排泄物による汚染は早急な対策を必要としている。

(4) 地 下 資 源

中郷層群の砂岩層及びシラス層が土木用材料として採集されている以外、目立ったものは見られない。

(遠 藤 尚)

Ⅲ 土 壤

本図幅は宮崎県の南西部に位置し、大淀川の上流にあたる都城盆地が図幅中央部の大部分を占め、東部は南那珂山地の一角からなり、西部は霧島山系の山麓地を形成することから3つの地域に大別される。

山岳、丘陵地の土壤は、頁岩および砂岩を母材とする褐色森林土が急傾斜地を主体にみられるが大部分は火山噴出物を母材とした黒ボク土が多く、また長期にわたる気候、植生などの影響から黒ボク土が退色し褐色森林土化したものも多い。

緩傾斜地や台地上の地域は、大部分が下層にボラ層やシラス層を有する地帯で、表層は比較的厚い火山灰層によって被覆され黒ボク土壌となっている。

なお、中央部にあたる盆地には解析扇状地が発達し、段丘砂礫層を形成している。この地帯においても火山噴出物のボラ及び火山灰が堆積しており黒ボク土壌となっている。

また、盆地の中央部を貫流する大淀川及びその支流の沖水川、萩原川、東岳川、庄内川、丸谷川などの各流域には三角洲性低地が発達し水田地帯となっている。土壤は灰色低地土壌、グライ土壌で一部には泥炭土壌もみられる。

1. 黒ボク土

本図幅中に広く分布する黒ボク土は霧島、桜島などを主な噴出源とする火山抛出物に由来するもので軽石を多く混入している。本図幅ではこの軽石の混入程度、その厚さ、表土の深さ及び乾湿などの条件により次の土壤統群に区分した。

1.1 厚層黒ボク土壌〔AT〕

本土壌は黒ボク土のなかで腐植含量が高く、土色は明度、彩度ともに低く黒色を呈し、表層土が50cm以上の厚さを有するものである。大部分は下層に軽石層或はアカホヤ層がみられる。この土壌は台地や丘陵地或は扇状地などの平坦地に分布している。

本土壌の第1層は厚さ20cm内外の腐植に富む砂壤土で軽石を含むものが多い。第2層は50cm内外の厚さを有し腐植に頗る富む埴壤土で軽石の含量は少ない。第3層は軽石層となりその厚さは地域により異なる。本図幅のなかでは1m内外のところが多く、その粒径は数mmから数cmに及ぶものまで分布する。

表層の黒ボクは一般に磷酸吸収係数は大きく、有効態磷酸や置換性塩基類の含量は少ないものが多い。

下層の黒ニガは磷酸吸収係数は極めて大きく、有効態磷酸は少ないが、置換性塩基類は比較的多く含んでいる。作物の生産性は中程度か低いものが多い。

1.2 黒ボク土壌〔A〕

火山抛物体に由来する土壌の中で腐植含量の高い黒色の表層土が25 cm以上、50 cm未満の土壌で平坦地や山麓の丘陵地帯に広く分布する。

この土壌の下層には、腐植をほとんど含まない明橙色の赤ホヤ層がみられる場合が多い。平坦面に分布する黒ボク土壌は理化学性ともわるい。磷酸吸収係数は、大きく、有効態磷酸は数%で少ない。

しかし、山腹斜面や山麓斜面では、混合母材のものが多く、礫を含み、下層は褐色の基岩風化土壌と接して、理化学性も比較的良好な場合もあり、また50 cm以上の下層にボラ層がみられることも多い。養分状態は中庸で森林としての生産力は中程度であって、スギ造林地として利用されている。

1.3 粗粒黒ボク土壌〔A-C〕

火山抛物体に由来する土壌のなかで50 cm以内に火山礫または軽石（ボラ）層が出現するものである。この軽石（ボラ）層の層厚は50 cmから数mに及ぶこともある。土壌の理化学性は黒ボク土壌とほぼ同じである。

森林としての土壌生産力は、黒ボク土壌にくらべて、やや低い傾向である。普通畑では軽石層の介在による物理的な障害のため生産力は低い。

本図幅における山麓緩斜面や丘陵地における土壌の大部分は、この種の土壌で占められており、この地域の特色ともなっている。山地ではスギ、ヒノキの造林地として広く利用されており、農地では一般畑作物、飼料、茶、桑などが栽培されている。

1.4 多湿黒ボク土壌〔A-W〕

本土壌は、黒ボク土のなかで水の影響を強く受け、膜状、糸根状などの斑紋をもつ湿潤な土壌である。この土壌の層序や理化学性などは厚層黒ボク土壌と略同じである。

この土壌は図幅内の台地や丘陵地及び扇状地などの平坦面で利水の便な地域に分布している。

水田として利用されており作物の生産性は中程度である。

1.5 粗粒多湿黒ボク土壌〔AW-C〕

本土壌は黒ボク土のなかで水の影響を強く受け、膜状、糸根状などの斑紋をもつ湿潤な

土壌である。この土壌は表層下25cm内外から軽石や円礫層となるものであるため表土が比較的浅い。土壌の理化学性は粗粒黒ボク土壌に類似している。図幅内の台地や丘陵地及び扇状地などの平坦面で利水の便な地域に分布している。水田として利用され作物の生産性は低い。

1.6 黒ボクグライ土壌〔AG〕

本土壌は黒ボク土のなかで水の影響を強く受け、膜状、糸根状などの斑紋をもつとともに、湿潤で下層は常に還元状態となりグライ層をもつものである。この土壌の層序や理化学性などは厚層黒ボク土壌に類似しているが、下層がグライ化されていることが特徴である。

図幅内の中央附近で丘陵地間の平坦面のなかで利水の便はよいが稍凹地の地域に分布している。水田として利用され作物の生産性は稍低い。

1.7 粗粒淡色黒ボク土壌〔AE-C〕

火山灰またはその含有割合が高い母材に由来する土壌であり、腐植含量が10%以下で明度、彩度ともに4前後の淡色をしめす黒ボク土壌と黒色の表層土の層厚が25cm以下の黒ボク土壌であって50cm以内に火山礫層や軽石（ボラ）層をもつ土壌である。

黒ボク土壌と接する緩漫な稜線上に分布することが多く、森林における生産力は乾性褐色森林土よりも良好であるが一般的に低いものが多く、ヒノキの造林地として利用されることが多い。農地にはわずかに分布しており、一般畑地として利用され、作物の生産性は低い。

2. 褐色森林土

2.1 乾性褐色森林土壌〔B-d〕

乾燥しやすい山地の稜線および周辺部に多く現われる土壌である。比較的腐植含量は少なく、表層（A層）は浅く、床土（B層）との境界は判然としている場合が多い。A層およびB層上部には乾燥の影響を受けた堅果状構造が発達し、菌糸が認められる場合が多い。褐色森林土のBA, BB, Bc型に相当する。有効土層は浅く生産力は低いので広葉樹の天然施業地となっているものが多い。

2.2 褐色森林土壌〔B〕

山腹中部から山麓の凹地および沢筋に出現する土壌でA層は黒褐色ないし暗褐色で厚く、B層への境界は漸变的である。一般に表層は降下火山灰を混入して腐植に富み通気透水性

にすぐれており、森林としての生産力は高い。スギ、ヒノキ人工植栽の適地であって、林業的な利用価値の高い土壌である。

3. 灰色低地土

本図幅のなかで河川流域や山麓扇状地などの平野部に分布している。非固結堆積岩を母材とするもので、腐植含量は含む～富む程度、色は灰色～灰褐色を呈し酸化沈積物がみられる。土性や砂礫層の有無などで次の土壌統群に区分した。

3.1 灰色低地土壌〔GL〕

本図幅内で河川流域の大部分を占めており、作土下の色相はおおむね2.5 Y～1.0 YRを呈している。膜状、糸根状などの斑紋を含み、土性は砂壤土～壤土のもので軽石や円礫がみられる。水田として利用されており土壌養分状態は中庸で、作物生産性は比較的高い。

3.2 粗粒灰色低地土壌〔GL-C〕

本土壌は灰色低地土のなかで表層下2.5 cm内外から砂層或は砂礫層となるものである。表層土はおおむね2.5 Y～1.0 YRの色相を呈し、膜状、糸根状の斑紋がみられる。

河川流域や山麓谷間などに分布している。水田として利用されており土壌養分状態は低く、作物生産性も低いところが多い。

4. グライ土

本図幅内の河川流域や丘陵地及び山麓の谷間などに分布する。非固結堆積岩を母材とするもので、腐植含量は含む～富む程度、色は灰色～青灰色を呈し酸化沈積物もみられる。湿潤で下層は常に還元状態となりグライ層をもつものである。この土壌の層序や理化学性などは灰色低地土に類似しているが、下層がグライ化されていることが特徴である。土性や砂礫層の有無などで次の土壌統群に区分した。

4.1 グライ土壌〔G〕

本土壌は表層下5.0 cm以内にグライ層をもつもので、作土下の色相はおおむね1.0 Yかそれより青色を呈する。膜状、糸根状の斑紋もみられる。河川流域の平坦地のなかでも周辺より稍低地か、或は丘陵地間の谷間などに分布している。土性は砂壤土～壤土のものである。水田として利用されており、土壌養分状態は中庸で作物生産性は中程度である。

4.2 粗粒グライ土壌〔G-C〕

本土壌は表層下5.0 cm以内にグライ層をもつものであるがそのなかで2.5 cm内外から砂層或は砂礫層となるものである。主として河川流域の平坦地のなかでも周辺より稍低地か、

或は山麓谷間などに分布している。水田として利用されており、土壤養分状態は低く、作物の生産性も低いものが多い。

5. 泥炭土

5.1 低位泥炭土壤〔LP〕

本図幅内の河川流域に一部分布する。表層土30cm内外は非固結堆積岩を母材とする灰色の砂壤土～壤土で酸化沈積物をもつ。下層土はヨシなどを主材料とした集積の泥炭層となる。水田として利用されており、土壤養分状態は低く、作物生産性も低い。

(菅 道 教, 河 野 満 雄)

IV 土地利用現況

1 農 地

農地は、図葉の中央部から西部に集中している。

水田は、図葉の中央部から東部に広がる開析扇状地及び大淀川とその支流沿いの低地部に広がっている。

畑は、図葉の西部のシラス台地と東部の開析扇状地の中央部が、普通畑、樹園地等として利用されている。

2 林 地

本図葉の主な林地は、図葉東部に広がる諸県山地及び南那珂山地（鰐塚山地）に分布している。これらの林地は、ほとんどが国有林で占められている。また、林地の88.3%が人工林であり、県平均の69%を大きく上まわっており、その人工林のほとんどが杉で、「鉄肥杉」の産地として林業が盛んである。

表Ⅳ-1 地域の農地面積

(単位:ha)

市町名	耕地面積	田	畑							牧草地
			計	普通畑	樹園地				その他樹園地	
					計	果樹園	茶園	桑園		
都城市	8,100	3,839	4,261	3,982	259	19	79	146	15	20
日南市	2,205	1,268	937	262	663	626	5	27	5	12
田野町	1,216	512	704	570	127	81	18	27	1	7
北郷町	613	384	229	59	154	137	5	12	-	16
三股町	1,549	805	744	554	162	103	25	29	5	28
山之口町	867	446	421	351	68	2	1	65	-	2
高城町	1,879	956	923	856	67	1	5	61	-	-
山田町	1,399	570	829	712	117	13	3	101	-	-
小計	17,828	8,780	9,048	7,346	1,617	982	141	468	26	85
財部町	3,556	1,365	2,191	2,179	12	3	-	-	9	-
末吉町	5,467	1,736	3,731	3,716	15	-	-	-	15	-
小計	9,023	3,101	5,922	5,895	27	3	-	-	24	-
合計	26,851	11,881	14,970	13,241	1,644	985	141	468	50	85

1975年農業センサス「宮崎県の農業」による。

表Ⅳ－2 地域の林野面積

(単位：ha)

市町名	総森林 面積	国有林	民有林						国有林 率 %
			計	針葉樹	広葉樹	竹林	その他	人工林 率 %	
都城市	13,993	5,530	8,463	7,611	613	178	61	91.8	39.5
日南市	22,477	8,473	14,004	12,381	1,215	274	134	88.4	37.7
田野町	8,003	5,466	2,537	2,123	391	18	5	83.8	68.3
北郷町	15,551	11,946	3,605	3,478	64	43	20	96.5	76.8
三股町	7,629	2,799	4,830	3,817	864	31	118	78.3	36.7
山之口町	7,819	6,509	1,310	1,260	15	25	10	96.0	83.2
高城町	5,530	4,236	1,294	1,079	168	38	9	83.1	76.6
山田町	3,661	1,194	2,467	2,166	263	29	9	87.0	32.6
小計	84,663	46,153	38,510	33,915	3,593	636	366	88.3	54.5
財部町	7,211	—	—	—	—	—	—	—	—
末吉町	6,415	—	—	—	—	—	—	—	—
小計	13,626	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	98,289	—	—	—	—	—	—	—	—

昭和54年宮崎県林業統計要覧

1981年3月 印刷発行

都城・北諸県地域
土地分類基本調査

都 城

編集発行 宮崎県農政水産部農業振興課
宮崎市橋通東2丁目10-1

印刷 (株)富士マイクロサービスセンター
熊本市水前寺6丁目46-1
TEL(0963)-83-3911